

| | |
|-------------|-------------|
| 群 教 セ | G15 - 01 |
| | 令 4 . 280 集 |
| | 高 - キャリア |

令和 4 年度長期社会体験研修報告書

研修先：株式会社ヤマト

長期社会体験研修員 石川 誠一

I 研修内容

1 研修先の概要

株式会社ヤマト（以下、ヤマト）は、昭和21年7月に設立された総合建設業者である。本社は群馬県前橋市にあり、関東一円の支社及び営業所、研究施設、教育施設、加工工場や多くのグループ会社と共に事業を展開している。空調、冷凍・冷蔵、水処理技術を中核に、近年は建物のプランニングや意匠デザインを含めた建築設計にも注力している。「建設プロダクトのヤマト」を標榜し、建設業では常識であった分業生産を見直し、建物自体を製品と捉え、基本計画から設計、施工及び運用まで一括して提供することを理念としている。また、設備配管の工業化により、自社工場で製造した高品質な加工管を建設現場へ供給し施工するという、他の総合建設業者にはない先進的な挑戦をしている。

2 研修先での主な研修内容

(1) 人事部での研修【4月～5月、3月】（研修場所：本社）

入社式の設営や運営補助、学生向けの企業説明会と工場見学会の運営補助など、人材に関する総合的な業務を体験した。また、高校への求人票持参と応募依頼、進路ガイダンスでの会社案内、事業説明に関わり、採用する企業側の立場で教育現場と接することができた。企業は優秀な人材を確保するために、多大な労力と時間をかけ、採用活動に取り組んでいることを知ることができた。

(2) 教育センターでの研修【4月～5月】（研修場所：ヤマトテクニカルスクール）

教育センターは、昭和54年に開校されたヤマト保有の教育専門施設が認定職業訓練校へと県の認定を受けたものであり、新入社員のうち大卒者、専門学校卒者は1年間、高卒者は2年間入校し研修を受ける。新入社員と共に、ビジネスマナーや安全教育をはじめ、ヤマトの技術者として必須な給排水衛生設備、空調設備の基礎について学んだ。また、それに付随する配管工事の実習、建設現場で必要な資格講習を通じて、ヤマトにおけるきめ細かな社員教育制度を体験することができた。

(3) 環境事業部での研修【6月～2月】（研修場所：本社及び建設現場）

主な事業フィールドは、浄水施設から配水施設、浄化センターに至るまでの水処理プラントであり、その案件の多くが公共事業という大きな特徴がある。電気一課において、上下水道施設の現場調査やそれら施設に関わる計装の保守・管理、設計及び工事という施工管理の業務に携わった。また、ITネットワークを活用した各水処理施設の遠隔監視システムの有効性、利便性について学んだ。人々の生活に密接したライフラインの維持、管理に関わる働きがいや、お客様の立場に立った迅速な対応、心配りを多くの場面で目にする事ができた。

3 キャリア教育実践

(1) キャリア教育資料について

ヤマトでの研修を通して施工管理業務に携わったことから、そこに焦点を当ててリーフレットを作成した。施工管理は、建設現場において各作業を統括、調整し、計画通りに工事工程を進めていくための中心的な役割を担う仕事である。リーフレットは、施工管理の主な業務の紹介とその中で必要とされる資質・能力を紹介した。また高校生にとってどのような場面が自分の能力を高めるきっかけになるか、そのために必要な心構えや取組について分かりやすい構成になるよう努めた。自分と向き合うことの必要性や自分を認めることの大切さ、他人と違うことで生まれる価値など、ダイバーシティ&インクルージョンが通念となるこれからの社会で、羽ばたき成長していくための一助となるリーフレットにすべく工夫を凝らした。

(2) 実践の概要（県立渋川工業高等学校）

授業実践

題材名 「私はこうする！～行動目標を立てよう～」（特別活動）

対象 第2学年 電気科 40名

生徒は、電気設備に関する知識とそれらの工事、保守・管理、電気機器の構造や仕組、情報技術について専門的に学んでいる。進路希望は4割が就職、3割が進学を志望していた。授業では、職種ごとに期待される資質・能力を探り、グループワークを通して、職種の特性を理解し、職種ごとに適材適所の人材配置になるような活動の場面を設定した。自分のよさや課題に向き合い、理想の自分へ近付くための見通しをもたせ、行動目標を宣言させた。「始動人」として一步を踏み出すことに期待し、進路実現に向けて、自分自身を磨き上げるために自問自答する授業を行った。

II 研修成果

1 人事に関わる研修について

人事部での研修では、企業の存続と事業の継続のために、優秀な人材の確保が不可欠であることを学んだ。数ある企業の中から、ヤマトを選択し、入社してもらった難しさは、学校が抱えている課題と同様であった。確かな信念をもち挑戦する姿勢や積極的な広報活動など、参考となる企業の取組が多くあった。また、企業のダイバーシティ&インクルージョンの概念にも触れ、教育現場でも多様性を認め合い、生かす組織づくりや授業の指導法、生徒との関わり方なども考えていく必要があることを実感できた。

2 施工管理に関わる研修について

施工後の形が図面通りであるかという品質管理の業務からは論理的思考力、危険予知活動や安全教育訓練などの安全管理の業務からは想像力、工程管理や工事全般の業務からはコミュニケーション能力が必要なことを感じた。特に施工管理としては、受注から竣工、引渡しまで人とのコミュニケーションが不可欠であることを学んだ。水処理という社会インフラに関わるエッセンシャルワーカーとしての働きがい、気概を感じることもできた。さらに、人とのつながりだけでなく、機材や工具、工法の知識や技術といったモノとのつながりも大切であると感じた。学校現場においても、理論に基づく現場実践の体験を生かし、人やモノとのつながりを意識した授業や指導を行い、人やモノをつなぐ人材の育成を目指したい。

3 キャリア教育実践（授業実践）について

生徒は進路実現に向けた行動目標を設定するために、自分と向き合うことで、自身の「よさ」や「らしさ」に気付くことができた。また、働くことに対しての不安や疑問については、ヤマト社員からのメッセージによって、解消できたようであった。生徒には、自己決定した行動目標が最終ゴールではなく、よりよい自分になるために再度、目標を見直し、再設定することの大切さを伝え、主体的に取り組むことで有意義な高校生活が送れることや成長できることを体感させていきたい。

III まとめ

企業はよりよい人材を確保するために、労力を惜しまず、試行錯誤していた。採用活動には費用対効果だけでは計れない、多くのものが費やされていた。また、県内工業高校を卒業しヤマトの貴重な技術者になった社員の活躍を見聞きする機会もあり、工業科の教員として非常に誇らしかった。地域に貢献できる「技術者の卵」を送り出したいという思いを新たにするとともに、研修を通じて、工業高校の存在意義を再認識することができた。今後は専門知識だけでなく、自分らしさや誇りをもつ人間性を兼ね備えた、未来を担う電気技術者を育成するため、本研修で身に付けた力を存分に発揮していきたい。

（担当指導主事 費田 秀樹）